

古文を楽しむ

『徒然草』『大鏡』を一例に



伊東玉美

現代の感覚との異同

大学の国文学科を志望してきた学生の中にも、古典文学に関心のある者とそうでない者がいる。新入生対象の基礎演習で、私は『徒然草』を好んでとりあげるが、今の大学生で入学前に『徒然草』を通読したことのある学生の比率は私が想像するよりずっと低い。よって「好きな章段を選んで発表しなさい」は成り立たず、一年間の蹴立はこちらが立てる必要がある。その際注意しているのは、『徒然草』らしさを体得できるようにすること、学生たちが討論しやすい章段を選ぶこととである。

住居論、恋愛論、友人論、さまざまな美意識、武士や成金に対する感覚、女性論、専門家論、老人若者論、どれも議論は盛り上がる。その中で学生たちは自分たちの考えばかり述べ立てたいわけではなく、いかにも「古典」らしい部分に興味を持つ場合もある。例えば第七二段、

賤しげなる物、ゐたるあたりに調度多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽に石、草木の多き。家の内に子孫の多き。人に逢ひて言葉の多き。願文に作善多く書き

載せたる。

多て賤しからぬは、文車の文、塵塚の塵。

(『新日本古典文学大系』)

格好悪いものを、数の多さから考えることの面白さや、それぞれのものがなぜ賤しく見えるのかといった勘所を彼らは当然拾っていくのだが、その中で「塵塚の塵」が多いのは悪くない、という部分では、「ゴミがきちんとゴミ箱に捨てられている」というのはよく掃除されていることの現れだから」とか、「本棚ががらがらよりぎっしりのほうが気持ちがいいように、せっかくならゴミもしっかり集められているほうが手応えがある」など、いろいろな解釈が試みられる。そこで佐竹昭広・久保田淳校注『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』が脚注で「内裏の右兵衛の陣に、宮中の塵を毎朝掃き集めて捨てた、塵山と称する塵塚があった」といふ：この塵山などを連想して書くか」と述べているのを手がかりに、内裏に特別な心情のあった時代、こうした裏方の場所に至るまで何かゆかしい気持ちがある、といった心理的伏線に加え、塵塚ならぬ塵山が歌題にもなっていたという和歌の伝統、そして宮中を掃き清めた時に集めてくる塵には、春の桜、秋の紅葉といった季節ごとの雅な塵もあってみれば、そんなところにも歌人兼好は意外な風情を感じとっているのかも、といった別の解釈の可能性をこちらが語り添えると、学生たちは驚くほど反応してくれる。現代にも共通していることが古典で表現されているために関心を持つ場合もあれば、もはや我々が見失っている何かを発見することで、知的好奇心を刺激されることもあるのである。

商取引は後る暗い？

例えば『大鏡』序の冒頭部分を題材に話す時も、こうした価値観の遠近感を指摘する方法は有効だと思う。

先つころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、軀と行き会ひて、同じ所にぬめり。…
〔『新編日本古典文学全集』〕

大宅世継・夏山繁樹らが奇遇にも再会するこれに続く場面で、物語の語り手は二人のやりとりを二回の「言ふめれば」で描写する。

短い間に三回推量の助動詞「めり」が使われるのはなぜだろう。人混みの中で年寄りたちと語り手との間には多くの人が行き交っており、彼らの姿が見えたり隠れたりするため、「同じ所にいるらしい」「〜と言っているらしい」となるのである。

そして繁樹が「貞信公が藏人少将だった時代に私はまだ童だった」と語るのを聞きとがめ、「少しよろしき者ども」だけが周りに集まって来る。藤原忠平の若い時分、と聞いて逆算できるのは、一定以上の教育を受けた人、当時の社会でいえば身分のある「よろしき者」だけなのである。

このように『大鏡』の冒頭部分には、よく考えられた表現や描写が用いられていることがわかる。適切な言い回しが読者を惹きつけるのは今も昔も変わらない。

繁樹はまたこの話の続きで「私の養父が主人のお使いで市に買い物に行った時、私の生みの母が乳飲み子の私を抱えて養子先を探しているのを見て、かわいいと思ってもらいけ

たのだ」と語るのだが、ここで、当時の市場について話してみると、学生たちは興味津々で聞いてくれる。網野善彦氏らが繰り返したべられたように、商取引というのは、古代社会では一種後る暗いことで、公然と行ってよいことではなかった。だから、だれの所有かはつきりしない、村境や橋・河原のような、何かと何かの境目の地で行われることが多かった。しかし、都市に商取引は不可欠なので、平安京の場合は東市・西市という指定された市場があった。

ところで商取引はどうして後る暗かったのだろうか。それは、当時の社会に、物は本来、もともとの所有者のもとから動かすべきではない、という考え方があったかららしく、鎌倉時代以降頻発された「徳政令」というのも、土地が本来の持ち主の手を離れて転売されるのを食い止めようとするものだった。

「他の人に売るべきでない物」とはどんなものだろう―現代なら麻薬とか売春とか人身売買とかいったことが浮かぶだろうが、考えてみれば、繁樹は銭と交換で本来の親から心やさしい養父に引き取られたのだった―。

こんなふうにして、古典の昔と現代とで、変わったものと変わらないものに思いをめぐらしてみるのは、関心の濃淡のある学生に向けて古文の楽しみ方を語る時の、手がかりの一つになるのではないかと思う。

いとう

たまみ

白百合女子大学国語国文学科教授。専門は中世の説話文学。著書に『院政期説話集の研究』（一九九六年 武蔵野書院）、『小野小町―人と文学』（二〇〇七年 勉誠出版）など。